
新説・仮面ライダー蒼～SOU～ Coloful Knights.

御劔剣次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新説・仮面ライダー蒼々SOUL Coloful King
https .

【Nコード】

N2585B

【作者名】

御劔剣次

【あらすじ】

美智留が蒼として目覚めてから十年、美智留は蒼を辞めていた。そしてブレインは大量発生型が出現するようになり、緑や白などの新たなライダーが戦っている。いったい十年の間に何があったのか。現在と十年の空白、そして、現在から数えて六十年前の話を交えて展開する新たな『仮面ライダー蒼』。(更新は遅くなります)

第一話 新説(前書き)

復活の仮面ライダー蒼。だけど美智留は蒼ではない。どうなるのか！？

第一話 新説

「へへ、一番乗り!」

一人の青年がうれしそうに叫んだ。腰に装着しているベルトに手を掛ける。

青年の前には無数の怪物達がいる。だが、青年は恐れるどころか、怪物達に向かって駆け出した。

「変身!」

青年はベルトのフレームを端まで引っ張り、叫ぶ。すると、緑色の光が青年を包んだ。

〈第一話 新説〉

「行くぜ!」

緑色の光から、全身に緑色の装甲を付けた仮面ライダーが現われた。

「武! 無理はするな!」

後方で一人の男が叫んだ。

「大丈夫つすよ美智留さん、この程度なら」

緑は左端のフレームを回転させた。

「デイメンションドロア・ツインソード!」

緑がそう叫ぶと、緑の両隣に緑色の光の塊が現われた。緑はその中に手を入れ、中から五十センチほどの長さの剣を取り出す。

「一気に決めるぜ!」

緑はそう叫ぶと右側のフレームを回転させた。

「フアスン・ビギン！」

緑がそう言うと、緑を中心にして、円形の緑色の光が広がり、怪物達を拘束した。

「まだまだ！ 全力解放！」

緑はさらに両端のフレームに手を掛ける。

「ディスプレイタイプ・スラッシュ！」

そう言いながら両フレームを回転させた。すると緑色の光が二本の剣に満ちていく。

「だありゃああ！」

緑色に輝く剣をメチャクチャに振り回しながら怪物達の中突っ込んでいった。次々と刻まれていく怪物達。

「そこまでだ武！ 時間だ！」

美智留は残った怪物の一匹の攻撃を避けながら叫んだ。

「え、もうですか！？」

緑は驚いた様子で美智留に聞いた。

「全力解放使ったら10秒しか持たないって言っただろ！」

美智留は怪物から離れて言った。緑は駆け寄り、怪物を切り倒した。

「少しくらい……」

「ダメだ」

美智留に強く拒否され、仕方なく変身を解く緑。だが、怪物達はまだ残っている。

「じゃあ残りのブレインはどうするんですか！」

武は怪物達 ブレインを指差しながら言った。美智留は左に顔を向ける。

「あいつに任せればいい」

武も美智留の向いているほうに振り返る。その方向から真っ白なカラーのバイクが一台こちらに近づいてきていた。

「変身っ！」

白いバイクに乗った人物はそう叫び、腰に巻いたライダーベルト

のフレームを端まで引つ張った。瞬時に彼を白い光が包み、光から白くHAKUくが出てきた。

「修はどうした」

美智留は近くに止まった白に尋ねた。

「あとから久美子さんが運転するバンで来るはずです。オレは自分のバイクで先に来ました」

白は答えると、すぐにブレイン達へ向かって走りだした。

「新入り一人で大丈夫ですかね？」

武は走り去る白の背中を見つめながら美智留に尋ねた。

「大丈夫だろ。新入りつつつても、あいつも立派なライダーなんだから」

美智留は微笑を浮かべて言った。

「デイフォーメーション、ウィップ！」

白は特製の革を取り出すと、そう叫んで左フレームを回転させた。すると、革は白い光に包まれて、鞭へと変化した。

「食らえええ！」

白は鞭を振り、ブレインに攻撃する。ブレインは鞭を受け、体に深い斬痕を作つて爆散した。

「次！」

白は次々とブレイン達を倒していった。そして残りは一匹となった。

「あれか、リーダーは！」

白はその一匹に対して構えた。残った一匹のブレインは、他のブレインよりも爪と牙が長く、角が生えていた。

「行くぞ！ ストウレンクスン・レッグ！」

白は右フレームを回転させた。白の脚が白い光を帯びた。それを確認すると、白はブレイン目がけて走りだした。そのスピードは異常なほど速かった。

ブレインは腕を前に構えて防御態勢に入った。

「無駄だ！ 全力解放！」

白は鞭を捨て、両端のフレームを回転させた。

「ライダーキック！」

そのまま前に飛んで低空前転をし、蹴りの体勢になった。

ブレインの腕に命中した。防がれたように見えた次の瞬間、ブレインは後ろに勢い良く吹き飛び、地面を転がって爆散した。

「さすがだな新入り」

美智留は拍手しながら白に歩み寄る。白は変身を解いて美智留を見る。

「いえ、あなたほどじゃないですよ」

白は笑顔で言った。

「まあそうだな」

謙遜しないんだ……。彼は苦笑いしながらそう思った。

その時、一台のバンが到着した。

「美智留さんブレインはっ……。片付いたみたいですね」
バンからおりてきた赤髪の男がそう言うと、美智留は男の後頭部をパーで殴った。

「馬鹿野郎、遅い」

「すみません」

美智留に軽く怒られ、頭を下げる男。

「いいえ、修さんは悪くありません。悪いのは私です」
バンから女性が一人降りてきてそう言った。

「どっちでもいいが、早めにこいよ」

「はい！」

美智留の言葉に二人揃って返事をした。

「よし、じゃあ打ち上げ！ 飲み行くぞ！ 今日修と久美子のおごりだ！」

「そんな！」

美智留の言葉に悲しみの声を上げる修。久美子は修の肩を叩き、諦めましようとおつづやいた。

第一話 新説（後書き）

蒼の完結理由そのいち、ネタ切れ　そのに、テイルズを書きたかったので口減らし　そのさん、あのまま進むと五十年前の話を出しづらかった　とまあ、こんな感じですね。テイルズも落ち着いてきた感じなので連載スタートです（更新は遅くなりますが）

第二話 新たなる戦士（前書き）

仮面ライダー蒼なのに蒼が出てこない……

第二話 新たなる戦士

「うわー、緊張する……」

髪を青く染めた青年が、研究所のような建物の前でつぶやいた。

「人を書いて飲み込むだけ？」

青年はおもむろに人を手の平に書き、飲み込む動作をした。

〈第二話 新たなる戦士〉

「……馬鹿みたいだ。やめよう」

深く深呼吸し、青年は建物の中へと入っていく。

「五木科学研究所へようこそ。今日はどういったご用件でこちらに？」

受け付けが青年に尋ねた。青年は一瞬ビクッと反応し、受け付けに振り返った。

「えと、あの、その、こ、こちらでーそのー……」

緊張のしすぎで舌がうまく回らない青年。

「あのーえー……ら、らら、ライダーの適合試験を……」

「ライダー適合試験の受験希望者ですか。かしこまりました、あちらのソファで少々お待ちください」

舌が回らない青年の意図を読んだ受け付けが話を進めた。青年はそつですとわずき、指定されたソファに向かい、腰掛けた。

「……人……人……人……」

あれから数十分ほど経ち、青年はいつのまにか人を手の平に書き、飲み込む動作をしていた。

「あなたですか、ライダー適合試験を受けに来た人は」

突如背後から声がして青年は驚き、ソファァーから転がり落ちた。

「……大丈夫ですか？」

声の主は手を差し伸べ、青年を助け起こした。

「はい、大丈夫です。えっと、あなたは？」

青年は立ち上がり、尋ねた。

「私は佐々木 陽一郎（ささき よういちろう）、ライダー適合試験の責任者です」

陽一郎は手を差し出した。

「そ、そうですか。俺は尚輝 尚一（ひさき なおかず）です。よろしく願います」

青年は手を握り、軽く振った。

「はい。じゃ、こちらに来てください」

陽一郎はそう言うと、施設の奥へと歩いていく。それに尚一も続いた。

「ここですよ」

陽一郎が扉を開けながら言った。尚一は唾を飲み込んだ。

「よし、ここでライポン召喚だ！」

顎髭の濃い男性がそう叫びながらコントローラーを操作する。

「あ、ずるい！ じゃあ俺はミジナズチを！」

隣の男性も叫んでコントローラーを操作した。二人の前にあるテレビ画面から爆発音が聞こえた。

「よっしゃー！ 逆転勝ちだ！」

顎髭の男性は落ち込み、もう一人の男性は飛び跳ねた。

尚一が啞然として陽一郎を見ると、陽一郎は頭を抱えて苦い顔を

していた。

「はあ……五木教授！ 博美（ひろみ）！」

陽一郎が怒鳴ると、子供のような態度を取っていた二人がビクツと反応し、すぐに大人へと戻った。

「お、オホン……どうしたのかね陽一郎くん」

顎髭の男性はわざとらしく咳き込み、顎髭をさすりながら陽一郎に笑顔を向けた。

「五木教授、適合試験の受験希望者をお連れしました」

陽一郎はやや呆れながらも言った。五木は二人に歩み寄ってきた。

「ほう、この青年かね」

五木は尚一をじっくりと眺める。尚一は少しだけ後ずさった。

「よかるう。博美君、今あるベルトは何かね？」

五木は博美に尋ねた。博美は資料がビツシリ入っている本棚から、一冊のファイルを取り出し、開いた。

「えーとですね……現在残っているベルトは、改良型の蒼と紫、それと黒、灰、紺ですね」

博美は読み上げると、ファイルを閉じた。

「うーむ、暗いものばかりだな。明るいのはないのか。さて……」

五木は尚一の方に振り返る。

「では、どのベルトが君に合うか、試着しようか」

五木はにっこりと笑い、尚一は苦笑いでうなずいた。

「こちら第五地区！ ブレインが出現した！ 仮面ライダーを！」
一人の警察官が、こちらに迫り来るブレインに怯えながら無線を使用した。

『わかった、すぐに向かわせる！ 無茶をするなよ！』

無線の向こう側の人物は、焦るようにそう言った。

「ああ、クソ！」

警察官は舌打ちをして車に乗り込んだ。すぐにアクセルを踏んで発進させた。

「!?!」

だが、車は前に進まなかった。慌ててバックミラーを見ると、ブレインの一匹が後部を持ち上げている。

「クソ!」

急いで車から飛び出た。しかし、すぐ目の前にはブレインが何匹もいた。

「う、うわあああ!」

警察官は力の限り叫び、目を閉じた。

もうダメだ。そう思ったとき……。

「諦めるのが随分早いな。0点だ」

突如声が聞こえた。警察官が恐る恐る目を開くと、黒いコートが目に入った。

「まったく、最近のやつは腑抜けだな」

コートの人物がそうつぶやくと、シィンという、金属が擦れる音が聞こえた。

「まあ、戦う術すべを持たない者なら仕方ないが」

哀しげにつぶやき、鞘から引き抜いた刀をブレイン目がけて振る。ブレインは真つ二つになり、コートの男に蹴り飛ばされ、離れたところで爆発した。

「逃げる。今のお前に出来ることがそれだ」

警察官はコートの男に礼を言って、車に乗り込み、発進させた。

「フフフ……さあ来るがいい! 六十年来の因縁に決着を付けるために!」

男がそう叫ぶと、ブレイン達も共鳴するように叫んだ。

「武! ベルト装着しろ!」

美智留は車を運転しながら怒鳴った。武はあわててベルトを腰に

着ける。

「装着完了！」

武がそう言うのと同時に車が止まった。

「な、何だあいつは!？」

美智留が驚いて目を見開いた。武も車を飛び出し、ブレインと戦っているそれを見た。

「生身の人間が、ブレインと戦ってる!？」

武は驚きながらもベルトに手を掛けた。

「変身！」

武は緑へと変身を遂げ、ブレイン達に向かって走り始めた。

第二話 新たなる戦士（後書き）

はい登場「生身で戦う人」！ 前から出してみたかったんだ生身で戦う人。しかも六十年前と関係してるよ生身で戦う人。いったいどういう関係なのか生身で戦う人。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2585b/>

新説・仮面ライダー蒼～SOU～ Coloful Knights.

2010年10月12日15時00分発行